

刑場跡と志士たちの墓のある 南千住・浅草界限

東京浦川原会 会長 小菅俊信

五月二十五日(日)、今回の歴史文学散歩はあいにくの雨だった。午前十時に南千住駅前に集合した、小菅会長の挨拶がありスタートした。

今回は講師に三上讓先生を迎えて先導をお願いした、今回の参加者は二十一名でしたが、遠い所からも出かけて頂き幹事より感謝いたします。

最初は「小塚原」小塚原のお仕置場(刑場)跡で「こつかつばら」と呼ばれていた、江戸時代のお仕置場は品川の鈴ヶ森と千住小塚原の二ヶ所にあった。明治の初年に刑場が廃止されるまでに約二十万人が磔、斬罪、獄門などに処せられたといわれた。そこから少し先に「小塚原回向院」(浄土宗)がある。ここは死刑者・牢死者・行倒れの屍体は両国の回向院に埋葬された所といわれているが、幕府に願い出て別院として一寺を建立した。

次に延命地藏こと通称「首切り地藏」を通り「素盞(すさの)神社」に向かう。ここは刑石信仰の神社で境内には瑞光石がある、また元禄二年三月松尾芭蕉が「奥の細道」への門出にあたり、千住で別れを惜しんだ記念の句碑が残されている。

ここから円通寺を通り浄閑寺に向かう。この寺は江戸時代吉原で死んだ遊女たちを、この寺に投げ込まれるように送られて埋葬されたので、投込寺ともよばれていた。三上先生の説明によるとその数二万人を超え、過去帳によると遊女の死亡平均年齢は二一、七歳と言った。その年齢の若さに参加者一同はびびり、可哀そうに思えた。ここに「生まれて苦界、死して浄閑寺」の句碑がありさらに胸が痛くなった。

午前の最後の見学場所「葉記念館」で



浅草寺境内

大音寺前といわれたこの地に住んでいた一葉は、母と妹の三人暮らしで、荒物、駄菓子を売る小さな店を営みながら文学修行を続けやがてその生活体験が「たけくらべ」「こりえ」などの名作を生んだ。昼食は浅草の老舗とせうの飯屋で休息をとった、ドジョウ料理で満喫した。ドジョウは「どせう」と言う昔から四文字を嫌う。縁起が悪いことから三文字になったと言われている。

午後はずまず浅草新町周辺を歩いた、浅草本願寺に着いた、本尊の木造阿弥陀如来の立像は鎌倉時代に造られたとのこと、この境内一帯は七区に分割され、本堂周辺は一区、仲見世は二区、伝法院周辺は三区、奥山が四区、花屋敷が五区、見せ物興行街が六区、馬道西側が七区と区分されていた。六区は大正期の浅草オペラ、昭和初期の映画など芸能界をリード

した興行街となつて東京で一番の盛り場であつたことから、「六区」が浅草繁華街の代名詞となつた。
最後に雷門に到着、浅草全体の総括説明で、雷門は浅草寺の総門で寺伝では平公雅による創建で、現在地より南の駒形にあつたと伝える。焼失した後長く失われていたが昭和三十五年に切妻造で再建された。正しくは右の風神像、左の雷神像にちなんで風雷神門というのが江戸時代からすでに雷門と称されていたという。

午後四時三十分全ての行程が終了し、石田実行委員長より本日の歴史(文学)散歩の盛会と全員の無事故であつたことを挨拶し、次回の開催を約束して解散となった。

(東京浦川原会広報部)



東京浦川原会第8回文学散歩「樋口一葉記念館」前にて